

令和八年度

滝川第一中学校 入学考查 問題

A  
2  
日  
程

国語

(四十分・百点)

注意事項

- 問題は1ページから12ページまであります。
- 解答は、すべて解答用紙の枠内に記入しなさい。
- 「開始」の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- 受験番号と氏名を、解答用紙と問題冊子の表紙に正しく記入しなさい。
- 「終了」の合図で筆記用具を置き、監督の先生の指示に従いなさい。

受験番号						氏名

一 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。（指定された字数には、句読点その他の符号もそれぞれ一字としてふくみます。また、書きぬく部分にふりがながある場合、これを省略してもかまいません。）

日本には昔から生け花がある。今では海外でもイケバナという日本語がそのまま通じるが、英語ではフラワーアレンジメントというらしい。しかし日本の生け花とフラワーアレンジメントは、どこか違うのではないかと前々から思っていた。いつだつたか福島光加という草月流の花道家に会ったとき、  
「①生け花とフラワーアレンジメントはどう違うのですか」と尋ねたことがある。

福島さんは日本在住の多くの外国人に花を教えているだけでなく、しばしば外国に出かけて指導をしている人である。きっとこういうことに詳しいだろうと思ったのだ。すると、たちどころに、「フラワーアレンジメントは花で空間を埋めようとするのですが、生け花は花によつて空間を生かそうとするのです」という明解な答えが返ってきた。

そのとき、この答えは生け花とフラワーアレンジメントの違い

をいいえているだけでなく、日本の文化と西洋の文化の違いにも触れているのではないかと思つたことを今も覚えている。

福島さんは「花のライブ」というショーケーを開くことがあって、ときどき妻と見にでかける。ふつう生け花といえば、すでに花瓶に生けて飾つてあるものを眺めるものだが、このライブでは目の前のステージで花を生けて見せてくれるので、花がどのようにして生けられるのか、目の当たりにすることができる。A 門外漢の私などにはおもしろい。

ライブでは福島さん自身が生けるだけでなく、二、三人の弟子もステージに上がつて生けることがある。それを見ていて師匠と弟子はこうも違うものかと思つたことがあつた。師匠の福島さんの生ける花はどれも堂々として大きく見えるのに、弟子が生けた花は、たしかに上手にちがいないが、どこか②小ぢんまりしてしまうのだ。

なぜ師匠と弟子でこんな違いが出てしまうのか。それはひとえに花だけでなく空間を見て生けているか、その結果として花の置かれる空間を生かしているかどうかにかかっている。

一口に松、一口に桜といつても一枝ごとに枝ぶりや花や葉のつき方、色合いがみな違つていて同じものなど一つもない。もちろ

ん本番の前に花材を調べたり、リハーサルをしたりするのだろうが、ステージに上がつて実際、その花を目の前にすると、リハーサルでは気づかなかつたところが急に見えてきたり、あるいは同じ枝かと思うほどまつたく違うものに見えたりすることもあるにちがいない。

弟子はステージの上で<sup>へんげん</sup>変幻する花を手にしたとき、もちろん緊<sup>きん</sup>張<sup>ちよう</sup>もあるだろうし、師匠から教わつたいろいろの約束事に縛<sup>しば</sup>られることもあるだろうが、そのため<sup>③</sup>花のそのときの姿が見えないのではないか。弟子が自分では見ていくと思つて花はリハーサルのときに見た花であつて、もはやそこにある花ではない。目の前にある花の姿が見えていなければ、花を生かそうとしても生かすことなどできない。そうして生けられた花はどこかぎこちなく型にはめられているような窮屈<sup>きゅうくつ</sup>な感じがし、小ぢんまりしたものになつてしまふ。

一方、福島さんの生け方を眺めていると、片時もとどまらない雲や水のように刻々と変幻する花をどう生かすか、どこをどう切り、どこにどう生ければ、その花がもつとも生きるかだけを考えているように見える。百人を超<sup>こ</sup>す観衆の目の前で自分の手にある一本の枝、一輪の花の今の姿を一瞬<sup>いっしゆん</sup>にして見極<sup>みきわ</sup>めると、その花

の姿に応じてまさにB臨機応変に生けてゆく。生け花の難しい約束事などもはや眼中になく、すべてを忘れて花を生かすことに夢中になつてゐる。

ときには背より高い松や桜の大枝を手にし、見上げ、まるで自分のいちばん好きな姿になりなさいと呼びかけるように揺らし、枝をふわりと広げてやる。ライブは高層ビルの林立する東京の真ん中で開かれているのだが、福島さんはもともと松の枝のあつた野の空や桜の花を吹いていた山の風を感じてゐるようでもある。まるで少女が広々とした野山で花と遊んでいるような自由自在さであつて観客の目にはそれがすがすがしいものに映る。

こうして生けられた花は枝の一本一本、花の一輪一輪がみなのがびのびとしているばかりでなく、花の生けられた空間、東京のとあるホテルの無機質な空間が、どこからか風が通い、命を宿したかのようにいきいきと輝<sup>かがや</sup>きはじめるのだ。

生け花は花を生ける、花を生かすと書くのだから花を生かすのはいうまでもない。しかし「フラワーアレンジメントとどこが違うのか」という疑問に対する福島さんの「花によつて空間を生かす」という即答<sup>そくとう</sup>は花を生かすことによつて空間を生かし、その花によつて生かされた空間が今度は花を生かすということなのだろ

う。

日本の生け花では空間は花によつて生かすべきものであつて、フラワーアレンジメントのように花で埋め尽くすものではない。花とまわりの空間は敵対するものではなく、<sup>④</sup>互いに引き立て合うものとしてある。その花の生けられる空間とはいうまでもなく私たちが呼吸をし、生活をしている空間である。それはそのまま「間」といいかえていいものなのだ。

（長谷川櫂「和の思想　日本人の創造力」より。）

問一　——線部①について、「生け花」と「フラワーアレンジメント」の違いについて説明した次の文の【 】に入ることばを、それぞれ十字で本文中から書きぬきなさい。

生け花は【ア】が、フラワーアレンジメントは【イ】  
と い う 違 い。

問二　——線部A「門外漢」、B「臨機応変」の意味として最も

適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- A　ア　その道の専門家である人。
- イ　イ　その道の初心者である人。
- ウ　ウ　その道に関係のない人。
- エ　エ　その道に強い関心を持つ人。
- B　ア　決まりきった方法で対応すること。
- イ　イ　その場の状況に応じて柔軟に対応すること。
- ウ　ウ　あらかじめ準備した通りに行動すること。
- エ　エ　他人の意見に従つて行動すること。

問三　——線部②「小ぢんまりしてしまう」とあります。筆者が弟子の生けた花に「小ぢんまり」した感じを受けた理由として最も適当なものを、次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　弟子が花の種類を間違えて生けてしまったから。

イ　弟子が花の姿をよく見ず、型にはめて生けてしまったから。

ウ　弟子が花を生ける前に十分なりハーサルをしていなかつたから。

エ　弟子が空間を生かそうとして、花を見ていなかつたから。

オ　弟子がステージの照明に気を取られて集中できなかつたから。

問四　——線部③「花のそのときの姿が見えない」とあります。が、その理由について説明した次の文の【】に入ることばを、【ア】は五字、【イ】は十一字で、本文中から書きぬきなさい。

本番の前に【ア】をしたとしても、花は【イ】も

のであり、違うものに見えたりするから。

問五　本文中で、福島さんの生け方の魅力みりょくを筆者が比喩表現ひゆを用いて最もよく表している部分を、本文中から三十字以内で探し、それぞれ最初と最後の五字を書きぬきなさい。

問六　——線部④で筆者が、花と空間は「互いに引き立て合うもの」と述べている理由として最も適当なものを、次のア～オ

から選び、記号で答えなさい。

ア 空間が広ければ花が目立つため、花の美しさを強調する効果があるから。

イ 花と空間は、それぞれの価値を損なわないようにするため別々に鑑賞かんしやうされるべきものだから。

ウ 花が空間を生かし、空間が花を生かすという相互そうごの関係

があるから。

エ 空間が花の香りを広げる役割を持つており、鑑賞者の感覚に訴えかけるから。

オ 花を生けることで空間が完全に埋まり、無駄むだな空間がなくなるから。

問七　本文の内容として最も適当なものを、次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 福島さんの弟子たちは、花のライブで師匠と同じように空間を生かすことを意識して花を生けていたため、堂々とした作品に仕上がっていた。

イ 筆者は、生け花のライブを見て、花の種類や技術よりも、花を生ける人の服装や振る舞ふまいに興味を持つたと述べている。

ウ 福島さんは、花を生ける際に事前のリハーサルを重視し、本番ではその通りに忠実に生けることを心がけていると筆者は述べている。

エ 筆者は、福島さんの生け花を見て、東京のホールの無機質な空間が命を宿したように感じられたと述べている。

オ 福島さんは、日本の文化と西洋の文化の違いをよく理解しており、フラワーアレンジメントによつてこの違いを表現したいと考えている。

二 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。（指定された字数

には、句読点その他の符号もそれぞれ一字としてふくみます。また、書きぬく部分にふりがながある場合、これを省略してもかまいません。）

「あつ」

グラウンドのはじを歩いていた伊吹早弥が、とつぜん走り出したのは、花が咲いていたせいだ。ガクあじさい。弓道場のわきの花壇にぽちつと一輪咲いている。

早弥は自分の背丈よりもずっと長い弓ケースを持ち上げて、花にかけ寄つた。

① 濃い紫色の小さな花を、ラベンダー色の花弁がフリルみたいにふちどつていてる。

「こんな色やつたんだ」

あじさいは、土の性質によつて色が変わると先輩から教わつた。

この花壇に季節ごとの花を植えるのは弓道部の伝統だ。おかげで古くさい道場も明るく感じる。

早弥はその場にかがみこみ、そつと指を伸ばそうとした。が、やめた。② 小さくて可憐な花びらが精一杯咲いている様の、健気

で、なんと愛らしいこと。

ほっこりした気分になつていると、背後から地鳴りのような音がし始めた。近づいてくる。どうやら人の足音のようだ。「はあ、はあ」と、ときどき苦しそうな息づかいが混じつている。

立ち上がり振り返つたとたん、山のような人影が倒れこむようにやつてきた。三年生の柏木由佳だつた。体積がいつもの二倍はあると思つたら、大荷物だ。両方の肩、腕、手と、持てるだけ持つていてる。

「はー、疲れた」

由佳は体を震わせるようにして、ぜいぜいと荒い息を吐いた。

「先輩、大丈夫ですか？」

「あー、きつかった。結局追いつかんやつた。早弥ちゃんのこと、昇降口を出たとこで見つけて追いかけたのに、急に走り出すんやもん。はい、鍵」

「③？」

通常、弓道場の鍵は、当番の下級生が開けることになつていてる。なのになぜ先輩が？

早弥は不思議に思いながらも鍵を受け取り、ぎしがしと戸を開けた。

「ちょっと持つてもらおうと思つたんやけどね」

由佳はその大荷物を「どつこいしょ」と上がりかまちに置いた。

弓ケースと通学かばんとサブバッグを二つずつ。

だれのやろう?

と考える間もなく、サブバッグについたおびただしい数のマス

コットやストラップが目に入った。

持ち主、当番、ともに判明。

「さつき実良ちゃんがねえ」

由佳は昔話でも語り始めるような、のどかな調子で説明しだし

た。

「部室の前で古賀先生にまたつかまつとつてね」

古賀先生というのは、生徒指導の先生だ。

「引つ張られていきながら、『これこれ』ってわたしに荷物、押し

やつたんよ。まあ持てるだけ持つてはきたけど」

先輩に荷物を?

早弥はあきれかえったが、持たされた由佳は、さして怒つてい

るふうでもない。それどころか、

「④残りの荷物はどうなつたんやろうか」

なんて、自分が残してきた荷物の心配なんかしている。

「ねえ、早弥ちゃん、実良ちゃん今度は何したんやか。服装指導かな。今日も化粧濃かつたし」

「そうですねえ」

実良が何をしたのか、考えようとしてすぐにやめた。

むだやし。

実良の非常識な行動には、バリエーションがありすぎて、早弥

には考えがおよばない。

「早めに帰してもらわんとねえ。試合も近いし」

「大丈夫じゃないですか。実良、（A）だし」

ぼそつとつぶやくと、由佳は興奮ぎみに手をぱたぱたと振った。

「そうそう。早弥ちゃんもそう思うよね。始めたばかりで、あの的中率はありえんよね」

幼いころから弓道をやつている有段者の由佳が言うのだからまちがいはないだろう。

確かに実良は、入部したときからほかの部員とは明らかにちがつた。初心者にもかかわらず、的打ちですぐに中りを連発したのだ。

「勘がいいですね」

見ていた監督の顔色が変わったのを、よく覚えている。

一方の早弥はといえば、初めて持つ弓の長さに戸惑い、弦を引くどころではないありさまで、初日から暗い気持ちになつたものだ。

「去年の新人戦もすごかつたよねえ」

由佳の顔からはいつの間にか、笑いが消えていた。ありえない歴史を語るときのように密やかな声で言う。

これにもうなづくしかない。初めての大きな大会だというのに、実良はまったく緊張していなかつた。ひるむことも、気負うこともなかつた。それどころか楽しそうに的を射続けて、気がつくと決勝戦まで進んでいた。

さすがに優勝は逃<sup>のが</sup>してしまつたけれど、フォームの美しさでは相手に負けていなかつた。

背が高い実良が弓を構えると、それだけで迫力<sup>はくりょく</sup>がある。それでいて細長い腕はしなやかで、武道というよりバレエでも見ているような感じだ。けれど力はしつかりとこめられていて、弓から放たれた矢は、迷うことなく、一直線に的に向かう。

それに引きかえ、自分は（B）だった。

緊張のあまりがちがちに固まつてしまい、所作はおろか、息の仕方も忘れたくらいだ。

始めて一年と三か月。今だつて、やつと弦がまともに引けるようになつたレベルだ。まだまだ的に中るとか、そういう次元ではない。

「わたしには、才能ないのかも」

心の中で言うつもりだつたのに、砂を吐き出すような声が出た。「そんなことないよ。早弥ちゃんがんばつとるやん。そのうち結果がついてくるはずっちや」

そのうち、はず、ねえ。

早弥は小さなため息をついて、荷物を持った。うじやうじやとついた派手な小物や縫<sup>ぬ</sup>いぐるみのマスコットが、盛大<sup>せいだい</sup>に揺れた。

（まはら三桃<sup>みと</sup>「たまごを持つように」より。）

問一——線部①「濃い紫色の小さな花を、ラベンダー色の花弁がフリルみたいにふちどつていて」とあります。この表現からわかる、早弥の花に対する気持ちとして最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 花の色が不気味で、近づきたくないと思つていて。

イ 模様に特徴<sup>もよう</sup>があつて、興味を持つていて。

ウ 花の美しさに心を動かされていて。

エ 花の種類がわからず、不安に感じていて。

問二——線部②「小さくて可憐な花びらが精一杯咲いている様

の、健氣で、なんと愛らしいこと」とあります。ここでの「健氣」とはどのような意味ですか。最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 力強く、堂々としているさま。

イ 弱々しく、頼りないさま。

ウ 小さいながらも、頑張るさま。

エ 静かで、目立たないさま。

問三——線部③について、早弥は柏木由佳から弓道場の鍵を渡されたときに「？」と思いました。早弥が疑問に感じた理由を、三十五字以内で書きなさい。

問四——線部④について、柏木由佳が「残りの荷物はどうなつたんやろうか」と言つたときの心情に近い内容として最も適

当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 実良に怒つていて、荷物を放置したことを責めたい。

イ 直接渡されたため、荷物のことが気になつていて。

ウ 早弥に荷物を持たせたくないと思つていて。

エ 荷物が壊<sup>こわ</sup>れていなか心配している。

問五——（A）・（B）に入ることばとして適当なものを、次のア～オから選び、記号で答えなさい。

A ア 努力家 イ 非常識 ウ 先輩

エ 天才 オ 有段者

B ア 魚 イ 石 ウ 鳥

エ 風 オ 弓

問六 実良が弓道の試合で楽しそうに的を射ている様子を見て、早弥はどんな気持ちになりましたか。これについて説明した次の文の【】に入ることばを、【ア】は八字、【イ】は九字で書きぬきなさい。

実良が弓道の試合で楽しそうに的を射ている様子を見て、早弥は【ア】を感じ、【イ】のような気持ちになった。

問七 本文の表現の説明として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 「花が咲いていたせいだ」という表現は、花の香りに誘われて走り出したことを意味している。

イ 「地鳴りのような音がし始めた」という表現は、足音の正体に早弥が気づいたことを表している。

ウ 「弓を構えると、それだけで迫力がある」という表現は、実良の体格と動作の美しさを印象づけている。

エ 「息の仕方も忘れたくらいだ」という表現は、早弥が弓を持つて重く感じたことを表している。

三 次の文の【 】に入る、前向きな言い換えとして最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

(1) 彼は口が軽いと言わることもあるが、【 】ため、周

囲との会話が弾み、場の雰囲気を明るくする。

ア 人の口に戸は立てられない イ 話題が豊富で社交的な

ウ 井戸端会議好きの エ 言葉を選ばない

(2) 彼女は優柔不断に見えるかもしれないが、【 】ような、

細心の注意をはらつて物事を判断する力がある。

ア 右往左往する イ 二兎を追う者は一兎も得られない

ウ 決断力がない エ 石橋を叩いて渡る

(3) 彼は自分勝手だと誤解されがちだが、彼の【 】姿勢は、

周囲に流されずに自分の信念を貫く強さでもある。

ア 我が道を行く イ 空気を読まない

ウ 唯我独尊な エ 独りよがりな

(4) 彼女は怒りっぽいと言われるが、【 】ため、人間味のある人だ。

ア 烈火のごとく怒る イ 短気は損気な

ウ 感情表現が豊かな エ 気が短い

(5) 彼は何事にも無関心に見えるが、【 】態度は、冷静で落ち着いた判断力の表れでもある。

ア 冷めている イ 他人事のよう見ている

ウ 泰然自若な エ やる気がない

(6) 彼女は部活動で思うような結果を出せなかつたが、それを

【 】の機会と考えて、さらに練習に力を入れた。

ア スランプ イ ステップアップ

ウ プレッシャー エ リスク

四 次の——線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して書きなさい。

(1) 錢湯の入口にある注意書きを読む。

その計画には障害が多く、実現は難しい。

友人に秘密を打ち明ける。

来春に新しい定期便が就航する。

研修期間を経て正社員になる。

ケンサの結果、異常は見つからなかつた。

秋になると、シヨクヨクが出る。

タビジで出会つた人と友達になる。

天然資源のホウコといわれる国。

機械の不具合をカイゼンする。

(10)

(9)

(8)

(7)

(6)

(5)

(4)

(3)

(2)

(1)





